

談話會記事

序言 「談話會」と云ふのはよほど以前、歴史を言へば實に二十幾年の前から京都帝大で天文研究の人々が時々集つて天文學界の時事や各國の天文學雜誌に發表された論文や又は各自が研究してゐる事柄などについて紹介したり、批判したり、議論したりしてゐる會である。併せて懇談の意味も含んでゐる。今學年度は前年度に引き繼いで毎週火曜日の午後に開かれてゐる。1929年に花山の頂に銀色のドームが輝やく様になつてから、此等の人々は事實上大學内の天文學教室(吾々は略して教室と呼んでゐる)で研究する人と、花山天文臺(略して山と呼んでゐる)で觀測や研究する人とに分れる事になつたので、談話會は山と教室とで交互に開くことになつた。學年の中で切りが悪い乍ら此れから毎月「天界」誌上に於て談話會の梗概を一般の讀者に御紹介に及びたいと思つてゐる。讀者の大部分の方々には或ひはおよそ縁遠い記事かも知れないけれども、又一部の方々には幾分の興味を持つて戴けることと信ずる。もつとこう云ふ様に書いて欲しいと云ふ御註文があつたら筆者達にお通知下さつたら出来るだけそれに副ふ様に努めたい。

先づ今回はその手初めとして昭和六年度の新學年の初めからの分を與へられた紙數の盡きるまで快速度で御紹介に及ぼう。(幹事)

記事

1931年度第一回(花山) 昭和六年四月廿一日

1. 山村理學士が次の論文の内容を紹介された。理論的のもの。Matukuma-T.: Sur l'effect relativistique dans le problème de la variations des latitudes 【日本數物學會記事. 三期, 十三卷 第二號】(緯度變化の問題に於ける相對律効果に就いて)これは一寸簡単に御紹介出来ない。

2. 次いで高城武夫氏の東京天文臺訪問談に移つた。時計の方面が専門だけに時計室裝置、無線電信裝置等のことが主であつた。

3. 村上理學士。エロスが天文學界の興味を獨占してゐた頃エロスが細長く見えたと云ふ來電があつて、その變光の原因を美事に突きとめたときだつたので、次の論文を紹介した。

v.d. Bos: Physical Observations of Eros 【A.N. 5780】エロスが8字形に觀測されたことについて。因みにエロスの色から推定したスペクトル型は K8 である。

第二回(教室) 四月廿八日

1. 村上理學士 On the Variable spectral Lines in Spectra of 12 Canum Venaticorum. 獵犬座 α 星のスペクトル中の變化を示す線について Belopolsky 【A. N. 196, 1】、Kiess 【Publ. Michigan 3, 106】の研究と共に A. Markov の最近の研究 【Ap. J. 72, 301】を紹介。

2. 上島講師は次の論文を紹介された。

O. Struve: Bright Lines in B Stars 【Ap. J. 73, 94】B型星のスペクトルに現はれ

る輝線についての諸問題。線の輪廓狀況 (line contour) が浅くなる原因は主に星の自轉の影響に依るとの結論であつた。

第三回 (教室) 五月十二日

天文臺の人々が打ち連れて去る五月三日に東京天文臺を訪問されたので此の日はその土産話をきいた。併せて天文學教室内の談話室 (Club Room) の設備が完成したのでそのルーム開きを兼ねて懇談した。

山本教授が初めに近頃から出初めたノルウェーの Lund Observatory Circular について紹介された後、着席順に土産談をして貰つた。即ち 稻葉、宮澤、森川、中村、上島、柴田、竹田、山村、山本の諸氏が夫々の所感を興味深く話された。筆者二人は留守番役で特に面白くきいたが、讀者は「さぞ面白い話だつたらう」と推察される程度で我慢して戴きたい。(初めに斷つた通り此のたびは快速度のこと故)。

第四回 (教室) 五月十九日

此の日は専ら恒星の内部構造論に關するものであつた。

1. 栗原理學士, Sir Arther Eddington: The Opacity of Extended Envelope
2. 竹田助教授, On the Opacity of the Stars.
3. 村上理學士, G. Strasy: Se 型の星の絶體光度に就て [A. N. 5786]

の紹介及びそれに對する質問などがあつた。

第五回 (山) 五月廿六日

一日違ひに歸朝された上田教授と荒木助教授の外國土産話をきかして戴いた。

1. 上田助教授 米國では主に加州バークレー大學内の天文臺に居られた。米國の大學生々活の色んな挿話を面白く紹介された。次いで四千二百呎のハミルトン山上リツク天文臺の生活に就いて語られた。御歸途に於けるコロラド河ロエル天文臺、ヤキス天文臺等の訪問談を以て話を結ばれた。

2. 荒木助教授 獨逸を主として歐洲各國を漫遊された。最も長く滞在された詩境ボツダムでの感想に附け加えて獨逸の大學に於ける談話會の狀況や天體物理學の理論に於ける刻下の大切な研究方面について話された。又ハンガリヤの首府ブダペストに於ける A. G. 協會の總會に出席されたときの興味深き所感を次の句を以て結ばれた。
「ハンガリヤの湖に日暮れて四方が暗くなる頃、パイプをくわへて冥想するエデントン教授の姿が眼に残つてゐる」と。

第六回 (教室) 六月二日

11 竹田助教授 星の内部構造に關する次の論文を紹介。

Thomas: The Slow Contraction or Expansion of a Fluid Spheres.

2. 荒木助教授 東京天文臺の平山清次先生の宇宙進化論に關する最近のお考へについて述べられたものを紹介された。後、出席者一同はそれに對して隔意なき意見を述べ合つて懇談した。非常に皆の興味をひいた問題であつた。

3. 山本教授 一九三二年夏より一年間行はれる筈の International Polar Year (萬國協同極地研究年間) の計畫とそれに對して御意見を述べられた。

第七回(花山) 六月九日

1. 村上理學士 Wolf-Rayet Stars 及び Absorption O.Stars の分類に就ての最近の諸論文をまとめて紹介した。

2. 稻葉理學士 は次の論文を紹介。

S. Tscherny: Das Stadium der Evolution von β Lyrae (琴座 β 星の進化に關する考察)

3. 中村要氏 は次の二項について述べた。

イ) 30cm 赤道儀の Micrometer Constant (測微尺恒數) の決定に就いて。

ロ) 計畫中の寫眞レンズに就て。同氏は自分で磨いて作ったレンズで寫眞を撮つて、小遊星の觀測をして居られることは讀者も御承知のことと思ふ。

第八回(教室) 六月十六日

1. 山本教授は International Polar Year に關する文部省よりの指令を紹介された。極地觀測年の計畫は初めてワイブレヒト大尉に依つて堤唱され、直ちに1882年より83年に亘つて實施され學界に多大の功獻を成した。當時の協定の通り丁度五十年後に同じ研究が繰返されるのは甚だ有意義なことであらう。

2. 栗原理學士 E. W. Pike: An Extension of the Giant Sequence to Low Masses
これは蝕變星の觀測材料に基いて星辰進化の問題を取扱かつたものである。

3. 荒木助教授 K. Kanda: On Cepheid Variables (セフェイド型變光星に就て)。
セフェイド型變光星の變光範圍 Amplitude に關する統計的研究。

第九回(花山) 六月廿三日

1. 森川理學士 On Meridian Observations (子午線觀測の現状に就いて)。

現在グリニチ、ワシントン、プルコワ、ニース、等で子午線觀測をやつて居るが、主に Fundamental Stars の觀測に力が注がれてゐる。尙太陽、月、諸遊星の子午線觀測も可成りなされてゐる。まとまつた報告だつたので外の人々から色んな意見も出て面白かつた。

2. 山村理學士 次の論文を紹介。

E. A. Kreiken: Note on the Axial Rotation of the Stars [M. N. 91]

近來恒星の自轉の問題は學界の注目の的となりつゝある。觀測材料も可成り整つてゐて新理論樹立の機に當つてゐる。次いで

3. 山本教授 は改曆問題の成行きを説明せられ、皆はこれについて自由な意見を披露した。然しまとまつた意見を示した人は無かつた。

第十回(教室) 六月三十日

1. 荒木助教授 は談話會の意義について腹藏なき意見を述べられ、皆はこれについて夫々の考へを述べた。次いで

2. 山本教授は近く米國の變光星觀測家 David B. Pickering 氏が來朝されることについて話された。

尙上田助教授が左京區吉田本町一―番地へ轉居されたことの披露其他雜談があつて第一學期の談話會を今回で閉づることにした。